

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 23 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2016

課題番号：23520511

研究課題名(和文)ドイツ語動詞の語彙化と動詞範疇の連動について

研究課題名(英文)Relation between lexicalization of german verbs and verbal categories

研究代表者

野上 さなみ (Nogami, Sanami)

愛媛大学・法文学部・准教授

研究者番号：80325828

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、現代ドイツ語の動詞における語彙化の在り方が、動詞範疇の用法に及ぼす影響を探ることを目的としたものである。まず、移動動詞の語彙化パターンの調査を通して、「移動」や「状態」といった概念が単一の動詞に語彙化される際の制約等を明らかにした。次に、ドイツ語・フランス語・スペイン語の心理動詞の比較対照を通して、各言語の語彙化の特色の違いを示した。さらに「継続」の概念が慣用表現において語彙化される際の特徴も明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Main purpose of this research is to make clear the influences of verbal lexicalization pattern on the use of verbal categories in German. First, through the research of "movement verbs", became clear the semantic restrictions, when the notions like "movement itself" and "the kind of movement" are lexicalized into one verb. Second, through the comparing of "sence verbs" in German, French and Spanish, I showed the differences between the lexicalization-characters in the three languages. At the same time, I could show the character of lexicalization of the notion "duration" in idiomatical expressions.

研究分野：ドイツ語学、一般言語学

キーワード：ドイツ語 動詞範疇 語彙・語彙化 意味論 アスペクト テンス 比較言語学

1. 研究開始当初の背景

動詞の意味論的研究においては、個々の動詞の意味全体をより下位の要素に分析して語彙概念構造を示す研究が幅広く進み、動詞の分類についても多くの提案が行われ、語彙化のパターンについても詳細な分析が行われてきた。(下記論文の①、③を参照。)

また、ドイツ語の動詞範疇に関しては、時制・態・法についての研究が数多く行われてきている。動詞範疇の1つであるにもかかわらず、ドイツ語で文法範疇として確立してはいない「アスペクト(相)」については、この概念を表現するためにどのような方法があるのかを探る研究が進められ、別の動詞範疇や特定の動詞構文等がアスペクト概念の表現に利用されることも示されてきた。(下記②の論文等を参照。)

自身のこれまでの研究の結果、時制とアスペクトという2つの動詞範疇の性質を兼ね備えた結果相構造のような表現においては、構造に含まれる個々の基本動詞の語彙的・意味論的な特性が、構造全体の解釈に決定的な影響を及ぼすことが確認できていたので(下記著書④を参照)、アスペクトをはじめ、その他の文法範疇の表現に動詞の語彙レベルの意味成分がどのような影響を与えるのかについて、より体系的に探っていこうと考えたことが本研究の発端である。

① Talmy, L.(1985) : Lexicalization patterns: semantic structure in lexical forms. In: Shopen, T: Language typology and syntactic description. Vol.III, Cambridge

② Van Pottelberge, Jeroen (2004): Der am-Progressiv. Struktur und parallele Entwicklung in den kontinentalwestgermanischen Sprachen. Gunter Narr Verlag. Tübingen

③ Vendler, Z. (1967) : Verbs and Times. In: Vendler, Z. (ed.): Linguistics in Philosophy. New York

④ Nogami, S.(2000): Resultativkonstruktionen im Deutschen und Japanischen. Peter Lang, Frankfurt am Main.

2. 研究の目的

以上の流れを受けて、アスペクトだけに限らず他の文法範疇にも分析範囲を広げ、まずは現代ドイツ語および他言語の動詞における語彙化のパターンや特色を明らかにし、さらに、それらが動詞範疇の用法に及ぼす影響を体系的に示すことを目的とした。

3. 研究の方法

研究課題全体のサブテーマとして次の5項目を設定し、段階的に調査・分析を進める計画を立てた。比較言語学的視点からドイツ語を分析するため、調査の対象をドイツ語だけに限らず、他言語の動詞についても調査を行うこととした。

(1) 現代ドイツ語動詞の語彙化パターンや特色: 心理動詞、移動動詞、コミュニケーション動詞など、意味の上で共通項を持つ動詞群ごとに、語彙化のパターンを探る。

(2) 現代ドイツ語動詞に語彙化される要素やパターンが動詞範疇の用法に及ぼす影響: 機能動詞構文や進行概念を表す構文と語彙化のパターンの関係を探ることで、動詞の語彙的な要素と動詞範疇の関連を探る。

(3) 他言語の動詞の語彙化パターンや特色: 冒頭の(1)で行った資料の収集・分析を、ドイツ語以外の言語、特にフランス語やスペイン語など、同じインド・ヨーロッパ語族に属する現代語についても実施する。

(4) 他言語の動詞に語彙化される要素やパターンが動詞範疇の用法に及ぼす影響: (2)で実施した調査を他言語についても行う。

(5) 動詞の語彙的な特色と動詞範疇の用法の間の連動性に関する包括的な考察

4. 研究成果

(1) 移動を表す自動詞を対象として「移動」と「様態」の概念が共起できるか否か、という点に焦点を当てて調査を進めた結果、両概念の共起が任意か必須かによって、自動詞は2つのグループに分類でき、さらに共起が必須であるグループは、様態概念を強調する表現が可能か否かで、さらに二つのグループに分類できることが判明した。各動詞群についての調査結果を以下にまとめる。

第I群は、様態・移動の両概念が一つの動詞の中に語彙化されることが可能であるけれども、両者の共起は必須ではなく、必要に応じて「移動」の概念を抑圧し、「様態」の概念を単独で叙述することが可能な自動詞群である。

第II群(1)は、様態と移動という二つの語彙概念の共起が必須とされ、「様態」の概念を強調した表現は許されるが、「様態」の概念を単独で叙述することは認められないシステムをもつ動詞群である。

第II群(2)は、様態・移動の二概念が必ず共起しなければならない自動詞群のうち、常に「移動」の概念を中心に据えた叙述が義務付けられているグループである。

3つの動詞群の具体例を以下に示す。

【第I群】

2概念の共起は任意、様態の単独叙述が可
brausen (轟音を立てる), *flattern* (羽ばたく), *hüpfen* (跳ねる), *klappern* (ガタガタと鳴る), *rütteln* (激しく揺れる), *sausen* (唸りを上げる), *stampfen* (足を踏みならす)

ああ

【第II群 (1)】

2概念の共起は必須であるが、様態強調が可
fliegen (飛ぶ), *joggen* (ジョギングする), *laufen* (徒歩移動する), *rennen* (走る), *rudern* (漕ぐ), *schwimmen* (泳ぐ), *tanzen* (踊る)

【第II群 (2)】

2概念共起が必須であり、様態強調は不可
dringen (押し進む), *fallen* (倒れる・落ちる), *gehen* (行く), *krabbeln* (虫などが這う), *kriechen* (へびなどが這う), *klettern* (よじ登る), *kommen* (来る), *marschieren* (行進する), *sinken* (沈む), *steigen* (上がる)

これらを踏まえた上で、「様態」の語彙化に対する意味論的な制約を考察した結果、「様態」概念が「移動」概念とともに自動詞として語彙化されるための条件として、「移動と様態の密接度の高さ」が求められることが判明した。一つの自動詞に「様態」と「移動」の両概念がともに語彙化されるためには、「様態」が、「移動との間に因果関係が認められる特徴」や、「移動の根源や原動力であると判断できるような動作上の特徴」を表すものであることが求められる。

(2) 喜び・怒り・驚き・悲しみなどの感情や知覚を表現する「心理動詞」の語彙化の特徴とパターンを調査し、この動詞群において語彙化のパターンが多様化している要因や、非人称構造が果たしている役割などについて明らかにした。さらに、フランス語およびスペイン語と比較対照することで、三つの言語それぞれにおける心理表現の語彙化の特徴を示すことができた。

(3) 名詞化された基本動詞を含む機能動詞構文の中でも、不完了アスペクトの一つと捉えることができる「継続中」の概念を表現するものを主な分析対象として、機能動詞構文に含まれる機能動詞・前置詞の選択、さらに継続概念の語彙化イメージなどの考察を通して、ドイツ語での不完了アスペクトの表現における特徴の一端を示すとともに、ドイツ語の慣用表現において継続概念が語彙化される際には、基盤となる「具体的な位置関係」から、より「抽象的な継続状態」が比喩

的に導き出される形で表現が成立することなどを示した。「具体的な位置関係の叙述」から徐々に抽象度を高めながら「機能動詞構文による出来事の継続の叙述」が導き出されるプロセスを図で示すと以下ようになる。

I~III はいずれも、二つの参加者の間にある包含関係という共通のイメージに基づいている。位置関係の叙述 (I) では、個体が存在する場所 *Garten* (庭) の輪郭が明確であるのに対して、II と III では輪郭を徐々に不明瞭なものにした。動詞 *dienen* (務める) に由来する名詞 *Dienst* (勤務) による包含 (III) では、動詞に由来しない名詞 *Geruch* (噂) による包含 (II) よりも、さらに外界との輪郭が不明瞭になる。III においては、出来事が内的な視点に基づく継続現象として捉えられており、アスペクトが文法範疇として確立しているタイプの言語においては、動詞の不完了相の形態を用いて表現することがふさわしいものである。

I. 場所と個体の位置関係



Hans ist im Garten.

ハンスは庭の中にいる。

II. 現象による個体の包含関係



Hans steht in Geruch.

ハンスは噂の中に立っている。

→ ハンスは噂されている。

III. 出来事による個体の包含関係



Hans ist im Dienst.

ハンスは勤務の中にいる。

→ ハンスは勤務中である。

5. 主な発表論文等
〔雑誌論文〕 (計3件)

野上さなみ

ドイツ語の慣用表現における継続の概念について、機関誌「ニダバ」、査読有り、第45号、2016年、p.11-20

野上さなみ

ドイツ語の心理動詞における語彙化について、機関誌「ニダバ」、査読有り、第43号、2014年、p.1-10

野上さなみ

現代ドイツ語の自動詞における語彙化について、機関誌「ニダバ」、査読有り、第41号、2012年、p.98-107

〔学会発表〕 (計0件)

〔図書〕 (計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

野上 さなみ (NOGAMI Sanami)

愛媛大学・法文学部・准教授

研究者番号：98541848

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし

(4) 研究協力者 なし